

# 類聚名物考

百四十七

和書門			
二七九八	一一二	函	號
五	架	冊	一六

内閣文庫			
二七九八	一一二	函	號
五	架	冊	一六

内閣文庫			
番號	和	27798	
冊數	5	(	5)
函號	209	107	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

類聚名物考

百四十七卷

同日同月

五十六七八

神佛詠

和歌

式部卿

紫微宮印 同計五紙

同同同同

八十六

海海海

○ 仮名遣和歌部



式例



○かみち河内 か

○柿本八麻呂集 河内

河内は加果知かえらちの志やをみえいふとある

○河内は加果知かえらちの志やをみえいふとある  
それを字の中にもや知とある上の加え字のさると  
なるさうといふうへにこの集は後世に書れん  
る集抄をとりいつめて作じしものなれは新し  
もの、おふれともさきに集に集られたいふされよ  
かふいたよりよきとあるは

○とぎ業

○鴨毛明家集

はの雨のちやの何てを志とあるなりよきとある河内の住ひそ

○るふとぎ業波をかきり業はわたるこれに後世

の仮名遣の書ふなり

○かかこ 金輪

○お木集四 木の葉はきよきともあるかき輪といふ所の  
きつともあるよき

いふにやいつちゆけともせめおれかるをぬきほそくおるに

○金輪はお素和とそれをほのめけといふなり  
るはとあるなり

○れる 織り

○後日撰集一上

活字校訂改

よき書に衣をおりつけていくかきり河内のかく山

○衣機をとり織るときは折るよき折の時、半る  
ふあつれともさきとあるなり織といひり

さういふおるまてこそいふめ

堀の井

○拾玉集六 畠 秘 姫 尊

今いられあさきんをわされまいつかりものいつちらん  
○うゝ堀の井をいひ入るに井を伊の保名し甲  
わーいたう

十市里

○大鏡オオ政大臣伊尹のおとありの使はおとすてかきさな女  
もとつかりこりける

くれんよりゆきてかきんはふとものとちの里の抱うりしも

○大和国十市里いさをちるの城をきききよよふあふはな  
うりまをいとか

おふの河

○情 陰 見 上

うぐれのおくれのち城すけりとなかまおふの河とそ  
かつりも

ふとおふのほ乃ゆわれはんも何あふれとそ

○おふのいそ多き意とちなう大堰の堰あつと  
おふいとせるは誤とおふの伊はきんうふとそ

いりり  
稲荷

○散末集

すまふ

○末本坊に 後代

けさふれに花も枝生はふより風いたりよ吹とせれと  
風あふより吹い風のあふふふふのすうは吹すなれ  
あふは吹えられあふのあふる代稲荷はいふけとい  
名たう稲荷いかりよて堀のいそとそ

とせう

○東海集才ニ尾張より一はふり出て九ふりなり

とせうとせう  
とせうとせう  
とせうとせう

とせうとせう

○今集才十の伝名とせうあるを二疾といふはうけ  
まじうとせうは伝名たうとせうもまじうは後集の伝  
名たうとせうのさうなり

かひ

○お枕名

後集お院

うゝれてけ近に海の奥国までかひなきを  
かひなきは舟の抱えさやめたるなり  
かひなきの奥国は伝名たうなり

何と

○後集才十意二

概抱たる意

よと海の何とと消ゆる身や何れに恨とそ数なり

○おの泡沫ハ何かるをそに何れと云ふこれ  
伝名たうなり

同十六難二

かくれぬ我うきさ身をあのうの何とせうもやうい消

○今集才十の伝名は伝名たうとせうもまじうは後集の伝  
名たうとせうのさうなり

款式

款合次才

謙昨

款供追福

詩謙式次才

款合化法

同祿

可合式持儀



士孝範胡氏可也余中其後各作在押下先錄席心恒試而後錄  
師想不稱人必其是也代以故死大就心孝範胡氏錄之納  
其又研助者以事錄之淳言胡氏腰勺再錄錄之至千以助勺  
同錄之腰勺式及而之反法作四勢錄錄腰勺數反又胸腰勺  
次頭妙不各近惟不能多人入涉為動座即退下而而退坐  
溫換子手換入必必定對履之

○前錄元之十月九日之象室町殿人奉親房朝臣同作  
烈相和能作文暢陸出於給石自初法有變我之上西  
相生介座上終了乃上以筆座之退矣我怒笑與與未  
相與之故是也終了乃上以筆座之退矣我怒笑與與未  
高以錄師手便干 詩相改錄錄字入西水府上望之座上  
高教心望干父子法中大就心望干錄師上大耀文字不見  
不能錄師淳言席 長矣 錄師 宣實詩云誰人新席不長生

不化試與誰人也此席八不長生と錄如何と儀作改之  
尤惟矣又其去書云

○觀合修法 明月記

同上正治二年二月一日天晴

午時沐衆上立

辰巳辰法座東時沐衆入少時召諸前西面季經口在  
本押上江底處置降行保季至南座有衆不能季資衆等立  
小座日與人係無信大吏二人時各被祝蓋蓋長押上同座前  
四座不伴蓋各入款一毫左中右次大長及長印保季相共衆  
自受之伴蓋各入款一毫左中右次大長及長印保季相共衆  
上拜同座一聚毫打邊祝蓋披衣是其上次依伴左方先讀  
上保季祝蓋有南流水分已分月願左方一書曉露款左中右錄之二通方  
印讀上之左方 款伴讀之次相立可難坐被信少子  
各中之次判志定中之持之次才之候大略如此判志  
祝張書并膝願有 廿書讀上之記座毫毫本下取出款小  
番度數等 志之立保 步時各記座  
季子不為也

少部 相隠持等之ぬちの人の事を懐せしとて之新刻の  
た太内人のたをた後取たぬち

和歌會條古今集序

萬葉和歌の拾玉集はあまの倉の時よ古今集の序を披薩  
するよりえとまり

○歌會式

相歌取等も是あうう懐せとまりい後取も

あぬちもたうなる時のうふ時のうふたかそ時に後取懐せのと  
下下(下下)次等とまり下下(下下)一たうふとまり下下  
後取も時に下後取次等とまり数多てまよふ及時に下下  
のもと二三枚もまよふ後取一とまりあまの倉の時後取あぬち  
あまの倉も皆用ふの倉もまよふとまりては等とまり押おて  
ふとまりあまの倉取一人の時にたまりまよふとまり

○披薩○相薩地等三

又法製 五反も 三反も 親王互相二反も

○ 披 撮

○相産所第ニ於明氏を相立殿幕毎々の時としかくし、  
此風候よりめつりていふ事、一さきにありては、  
数反りし。

○講師之事

○東者縁ゆゑに講師のる先文章のそんじする時腰なる扇  
子をもぬきて直にそは文章のそんじよる文章と其のちり  
さすゆゑ之文字をたゞにんじりめよとてよるるふ昔様  
紙を、切地より久も讀まて題も讀春日岡の三字志の  
字漏るゝ名を讀まて人をまじりてむ解をさるる口  
を、実名を讀まて或は宿所の名或は家名をよむ按察大  
御守内大臣などやうの人、財は一人るゝ、形、さもある  
ぬ中御さかとやう、あまたあれ、三条も飛鳥井もよま  
直て中御さとも中納もよむ、一、前内大臣を、さき  
のうちのものを、是よりやも、皆一ぬよゝふ、讀、一、おない、まゐ  
きこと讀ま、<sup>字を</sup>四季の形も三字形も、さ、おる、あ、よみ  
まゝ、追出のる、讀、所、文字のか、ら、も、出せ、追出、ま

敬供追福

水音の先達掃部人麿を學ぶをも 佛教よらひ  
 承傳して以て之を 老宗家々の忌りもその人の  
 孫を咽つてありと好しうもいふ 退福のとき

○相系集一名玉露實永六年八月廿日中院西相烏九西相傳  
今日小食夢以祥月忌也勅和歌陪侍各勅額

明はすく秋の半もさぬ一<sup>月</sup>かゝる月あをきのみふ  
以ておれ各字歌としておれ又のおろそかにせし  
よりわけてある今よきとやその少々の山の月の  
抑えあらに三つおれ字にたれおれ心でおれ進福する  
頃なり

帝建治二年  
初之是也  
追補為と  
やらるる  
に糸糸  
傳はるる

同強之

伏蒙承<sup>二</sup>頤目之<sup>一</sup>指示保三年月裏江原之<sup>一</sup>指示但月字  
席者之外不若之里兒以記

華力神也極了讀例

百首

陳祐親作

櫻木のちの神志はもと妻のけさむのふり

本荒の梅

山  
吹

○未平州回春

三万六千首中

よち

我輩のしつゝの機さよもふ飛んでくれんのもー

○新六帖

庭花

位實朝

李少卿

ちうち、中、荒の極を甚かす、急ろ川ろやえ  
ま、お、云、仁、出、元、建、而、首、  
後、九、条、内、有、

後九條内之旨

山吹のふあゝの花を咲かせる秋よさき起病のまうきに

そのうゑ  
尚おと若と一首よむ例

金挽集上 あつ花

里、何れぬ志賀の花園そのかゝるものや、

女郎花といひて又花と一首よむ例

○耳底起上間先廣の女郎花とよむ花と又一首のうらよ  
詠ふさるる若出計よむ一さへ

むふこのろとけさる何

○まあおハ郭と先を花に入居一ふ親王あふ十首は時智  
たすふふゆさるるの時今一詩よ  
あふ原孝徳

あふふふと目とけさる何

○若丹家集

まああふ

あふふさるる若丹のゆもふとぬあ  
あふふさるるあふふとぬあふふの月

久方の何と受ける例

かひを

○赤津集の集まるなめこまて経て

ふのめつ東ぬぬふも久まはをくのまといふ

○今梅久方のほろいさ一月よあたるよはけふいつ  
のほろいさといふもの

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

一冊の中回文字ある

丹後

ふのめこ入ぬる集のまある神とく波の下よあめ

このまめるといふ詞にあり

あはれ

あはれとてとてあめあめとてとてあめの夢のつはあめ

このまめるといふ詞にあり

○後撰集を 秋下 讀みふか

こをくよとてれよりとて集の花をぬめよとてあめハあめ

このまめるといふ詞にあり

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note. The text is written in a fluid, connected style typical of the Edo period.

一首の中あの子同うきさう

○古今集

小野小町

一首の中あの子同うきさう

○赤染巻集

あつらひていともあつてえおさし  
おつらひていともあつてえおさし  
あつらひていともあつてえおさし

Additional handwritten text at the bottom of the page, continuing the cursive script.

一冊のうちに道二つあり

○赤染建集巻二

都路のふもあふく志をうしてそなたをいふ道

一冊中同種三つあり

○紀貫之集二

白雲のたまりりるうみの山をたづね我よりえ

けあふなるとふ何なりなりとふ何なり

あり

一冊中漢字三つあり

○雲葉集社子内親王あまの宮あまの宮

泣く身ゆふたのたぬきあふく人あふく人

一冊は同文字三つあり

○今更集上月お梅衣

○新後拾遺集

さあふりあふりあふり月影あふりやあふり

けあふりあふりあふり文字三つあり

一冊のうちに山字三つあり

○後撰集七秋下

あふりあふり

あふり

あふりあふりあふりあふりあふりあふり

一冊の中解字三つあり

○後撰集十巻二

あふりあふり

あふりあふりあふりあふりあふりあふり

名傷のあはれとて何れなるか

○耳底に響く鳥丸元廣口記

あはれとて何れは春の夕烟むせぬれり  
けり名傷よりれりよとてなる名をき

月風の風よとて

○壬生あき集もあき

これかきよのあきよに何れ風のあきとて

○伊勢集

○後撰集

人々風の風よとて何れあきのあきとて

○今挽集上

関西花

何れ風の風の風よとて何れあきのあきとて

横はまの泉がふとよ

○まふ抄四巻

新改

まふ抄に於ては、むすまへてふらひやめいさうのな  
けす判志書後三詩にもあらず、まふ抄ふとよの傍り中と云

夕月日並のな

○耳底記中夕はくいあひのそとよのこころ月と日なり

まふ抄夕月のそと

○今案夕月、並といふは、あひのそとよのこころのゆ  
はくは、夕月、のそとよのこころの入りと云ふ  
は、くは、夕月、のそとよのこころの入りと云ふ  
まふ抄、秋づくとも月一と云ふ

相二つと云ふは、涙と云ふ

○松玉集四 伊勢江東百首 田

早苗と云ふは、ゆにえりてを、まのふさのふさ  
日七 海上雲

○六百番、今案、松玉集、中、字、松玉

○源順集

不のくと、明るの涙を、え涙を、まの涙も、つゝ、あはれ





ありとも芳々よふ

耳庵記上 日光庵のありともふふ字さしはるる函  
こころのしとて けいんて制の何しはるるのやうえ  
かれども ちいさきざりーやまのふもろと

○拾玉集四 伴勢法華言々海

ーと雲の神のくれあふれくさるるさつものう波  
○あま秋云 色葉の早七首言 空やあふ  
とあめり山の早つきあふ 誰のあふくむく

尾よの鐘いつくも後何

合枕集上 寺を夕暮  
うち一々にあふくき 神のあふれ後何のあふくれ

ふもあふも飛渡よあふくさる何

○あま秋云 性永く四ふるる 後何  
時あれやるる山をぬけいふもあふく 性永く  
○後撰集七秋下 後人あふ

山風のふまのあふくさるるあふくさるるあふくさるる  
あふくさるるあふくさるるあふくさるるあふくさるる

○拾玉集三 あふくさるる  
あふくさるるあふくさるるあふくさるるあふくさるる



海と波と一し

○洞花集 意

もよほ二袖は清く雲るれや烟も波もあはれそあは

○新古今集

お山と雲りし人つれもく袖を波よのる月新

凡子の我座言其集七

関のせきと

○金挽集上 雲海と

うぶりの雲れ雲海とわづらふれそあはれそあは

あつたの髪

○あまの

はくすやあつたの髪もあはれそあはれそあはれそあは

後人ふ知



海より来る月とよむ所

○後撰集七 秋下 九月 つらきに 思ふ

七月の月の光をうかすかき秋の光をうかす

○お三 海より来る月とよむ所 思ふ

海より来る月とよむ所の光にばおちた今集れたの  
光の光とすれあひし光に照らすとちあはれし  
光の光とすれあひし光に照らすとちあはれし  
光の光とすれあひし光に照らすとちあはれし  
光の光とすれあひし光に照らすとちあはれし

海より来る月とよむ所 思ふ

今古歌詠

○旋返す

院中制を、夢之松極を

十月廿五日のありきとき

わくのうらにすめいもも仙人にす—てりうに  
いよにふやあきん

○後功院法製待

○東入記林道を法後功院中院也是軒を流しを後お年うて  
は免件その時待をゆ

猿原北に殘臘天今宵法舊思儼然前身蘇武去来否  
一瞬居諸十九年

也是軒なるもの

いひきやるの候をふいにを井よめる身とて年とい

神子清哥  
七人海哥  
蟬丸哥  
良暹哥  
  
伯名三編  
八葉女哥  
孤中德哥  
大中明哥  
  
伊勢半船  
和泉保志郎  
孫娘哥  
若兒哥  
於西哥  
依取上妻別時讀哥

菅家湯衣のより未祥の再考  
朝のふた名はこころそれ夕霞に咲くふ世のまもるゑん

○通名十

知義志

ぬき寸<sup>細</sup>ひたきありをいへも  
 くらり<sup>鯉</sup>か<sup>鰻魚</sup>くらむとくらち  
 くらむとくらち

○物名 正徳三ノ年法皇御製八首

鳥名十

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

鶯

虎

獸名十

牛

兎

熊

貂

鹿

狼

さしぬいさうやうとよもいさゝてんれさるるにむまれき

虫名十

イト

蜘蛛

蠅

風

ノミ

ミミ

蚊

蟻

蜂

イト

蜘蛛

蠅

風

ノミ

ミミ

蚊

蟻

蜂

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

魚名十

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

鰯

菜名

たふりきんちをそに菊 茅 蘭 落 蓼 萩 薺 菜 菖 葎 子さふこがし

本名十

推松楓栲楠標桐密楮

智名

松たろくすいふぬえのまにるるといか、かげもすし

獸名

いア狢か痛ら狢ち牛さ狢る狢も然う狢と然ふ狢の兎お兎き猫つ栗る鼠を鼠守鼠ふ鼠か鼠きて

虫名十

このころはちよと何ふきいんくろくもひふききくく  
か 倅 虫 蠅 蠹 蛛 蚊 蠶子 蝶 蛙

[illegible]

卷之四

[illegible]

國名

伯耆 肥後 美濃 出雲 能登 越前 加賀 越中 富山 石川 福井 滋賀 京都 大阪 兵庫 奈良 和歌山 徳島 香川 高松 愛媛 高知 福岡 佐賀 大分 熊本 鹿儿岛 沖縄

十名

○牡丹集十六戲賦十鳥得依字 鷗明兼鷺友雀躍共忘  
撥鳥憶老萊子雀憐丁令威 畏人如雉隱沒影類鴻  
飛那羨鶯知止鵲巢却依

十虫名

○同上又賦十虫用前韻一夢憐百足雲雀笑蠅飛客閑  
蠟旋磨僧閑螢入衣林蟬嘗露瘦土蚓食泥肥不用  
蚊蟲臂愛花蝶白依

○清三位詠

隱憂新和橋空と云々

新麻蕪の十名と云々

さういつるものとき飽喰のかうもゆへに造化字えよ

○このお飽喰あさひの神とこち入るりかともいふのふに  
又飽喰のふとひ入を饒有るをよ造化なりつとよむ

後



現存六帖

古六帖新撰六帖の外 既存六帖もこの世にすくえす物  
よ引く 本をりて去る 一々 一々

[illegible]

紀の海北さいみ涌れおきんものまのりくつかつ延せ人

三月十六日

推僞正名

かき流し四字の字に、縁をて、其の上を、去る所を、

六帖卷之六

2

天の河を色の柳やさめぬ人さそひの  
色に急ひぬる

六帖題詞

中勢以祝王福

二 中 影 に 衣 衣 代 の 小 有 き 花 咲 時 も ま ゐ る 人  
 去 後 一 位 良 教 口

去

五 ちくぬにうしあ山城のいつ  
 一位良教  
 此里にかた所  
 唱之

同第六

蘇東坡平朝臣

像成心女和

八條院之条

越部 九 縁の可列記有

續後撰集 卷中 洞院抄改家百々前に花

得悟具定母

さけいぢるそめうさせとこすも  
 程とすれぬ山櫻式

○未本抄五  
御居  
洞院接政家  
百々  
朋令

分列して其の如くに秋てうゑの空に鳥をさす

○續後撰集十一  
一

忠

後漢書卷之五  
光武皇帝本紀第五

寄雲亭

志をたのむをそれとておひの志を消さ

牙十二不造患の心を

さひのまゝにちもあきふかきうらやま

○未未抄 五  
空勝天王院名不  
法障子大渡浦

大空の雲をむすぶ松風にうきうきの  
建保二年名取百々

建保子名不百

[illegible]

志の後部を借りてお中のはじめこそ  
 わすれぬふにお中のほろけをたぐ

○夫也子  
與子  
述保三年名不百

名々おとしの歳のおとしのための

○新勅撰  
意也

清風堂

ありいぬきあかにも増えぬ  
我がぬき神の浦波

此後續撰集卷二以茅羅我知くかるとく空を

后宮女として立て裁られし女宮母を  
すなはち後成の女

○まふお一  
洞比標改系  
可之耐香

不もいふの故にやとぬらんあさく山のよみの一翫

すゝね 岩田小舟に之をきんは 某の人此を

同

欽

正三位

役なり衣の色やふん神北信富北より山吹

散

家集

祝光成茂

みへんをきくはるも精気やのちせの山にたつて

同七

葵

光緒二十八年八月十日

ちんやう張にさるやううう五代にたえううお

中丞昭光初任

そのまゝこれの山はゆるふふまゝのまゝ

はるに花はるの

音人へにさうのむいふのむにけししはるの唱  
このおれにふると名後志十六下四十五丁にふと花にふす  
 詞花集 日記このふと花にふす  
 紫式部  
 かさ月まの月のさうのむいふのむにけししはるの唱

○現ね六帖 名後志十六下四十五丁

ふきさふいふとふとにむいふのむにけししはるの唱  
同廿九丁  
 ふちふとふにけししはるの唱にけししはるの唱  
 同廿九丁  
 このふとふにけししはるの唱にけししはるの唱  
 光のむにけししはるの唱

はるに花はるの

○隆ね六帖 名後志十六下四十五丁  
 ふきさふいふとふとにむいふのむにけししはるの唱  
 同廿九丁  
 ふちふとふにけししはるの唱にけししはるの唱  
 同廿九丁  
 このふとふにけししはるの唱にけししはるの唱  
 光のむにけししはるの唱

宝治元年 山家集

○新集古今集 新下 名後志十六下四十五丁

○まふとふにけししはるの唱にけししはるの唱  
 名後志十六下四十五丁  
 大京や小壇の山は花はるの唱にけししはるの唱  
 名後志十六下四十五丁

卯酉の啼より日より申あたると申はるはそとちそよ  
日ハ管 後九条内大臣家百々管  
啼むくいさ後のはるもくくめ玉ハ管之う  
十條昨社百々樹下管  
音羽のかえ係柳 柳風かた一秋ちる友む一のけ

○詞花集 出

秋舉

ふま  
不弓

むよハ不ニ神ハ清兄ハ笑あれ也烟も波もあふぬ日ハあき

○懷中抄

隆秋

○詞花集 出

秋隆舉ハの考

めよたう誰うえき人竹生橋波にうろふ何なる玉恒  
むよハ不ニ神ハ清兄ハ笑あれ也烟も波もあふぬ日ハあき



古系原を

○茶中納光和以按寄

和以茶田伊豆義ハナハ高島買より法興院秘蔵を人あり

法興院の蔵に秘蔵ありと云ふ

樟の葉に毛ありて八十粒ぬ九寸も百も有るてありと云ふ

シ

○一遍上人寄

[illegible]

○ 諸君

何れもいぬやうなつたのゝよゝも  
何れもいぬやうなつたのゝよゝも

真黄々世界第<sub>一</sub>最白銀宮

カサメトヲモキリ子テモクオモシ  
重く重く重く對遅く遅く遅く遅く  
マテハナリキヲフテトモクヲリシ

右东凡已下縣句

○ 聯句 享保の比京邸大寺にて内裏も阿やうりけれうと思食へ

いづれはさるやうに一寸のつてもうさるやうに凡そんをすし  
かりければさるやうに一寸のつてもうさるやうに凡そんをすし

かきくけこ

高麗風を笑てかたしなれり

清くあつちやものさす

これ中  
お宝福

○ 飛鳥の帝は徳見代に改丹墀を此屋より火切せしむれば幸も吉月  
あるなり

時、夜、母、後の、暖、に、火、の、お、て、江、戸、へ、去、れ、る、由、法、申、  
ふ、奇、凡、を、受、り、し、る、も、之、と、し、り



あきつて見え、我身のけつうなれいひあひいりるま

○北に信濃を延来

いやにりまうてくる人のこころのけつうにすれる松

れあけをえんて  
すなをあるをえんて  
とまひておこしこころれい

やさうのまをあるをえんて  
あのもをえんて  
あのもをえんて

○永果 能く人かあはれに  
月あはる

さうさうのれをえんて  
あのもをえんて  
あのもをえんて

○江戸 探幽軒

さうさうのれをえんて  
あのもをえんて  
あのもをえんて

あのもをえんて  
あのもをえんて  
あのもをえんて

○松浦法行

述懐

あのもをえんて  
あのもをえんて  
あのもをえんて

み 栖川一ふ中勢つふし

桃園院宝暦十二年壬午七月廿二朔宣刻あはる

そのれい月十五あはるのれい

あはるのれい月十五あはるのれい

桃園院かられい月十五あはるのれい

あはるのれい月十五あはるのれい

あはるのれい月十五あはるのれい

あはるのれい月十五あはるのれい

せき 何れ神のるい月十五あはるのれい

あはるのれい月十五あはるのれい

あはるのれい月十五あはるのれい

桃園院かられい月十五あはるのれい

さひうす身あゝんて々宵かゝるお月をみる  
その此頃衆民詠てぬ村さうせられー  
うつともさひあされする世あゝる身れこれあま  
夜啼の乃にきりーとるーてかゝ世をさるうさ余  
はうー  
さうてさひさあせのゆにあらうさ身れらのあま  
あまれにむとりし身さうて思ふれさるーとるれ

さる橋又四郎と小又川

○右平記三 笠を戦さる さる橋又四郎めけけせーと打けて  
白昼に第一連のかりし時れをさうーとさあやさうーと平  
多虎の橋つめに一そのふをさうさうさうーける  
本は川の隅の光波をやりれかたかたあゝるさる橋  
さる橋めけけをさうて引ハ入うてさる名さんと詠につきたる  
小又川も一なにさか進さるれ一ほもかきけさるさう引さ  
とさうられハ又れとさうて  
かりも急ぬさる橋さうけりけりけりさる名を流す小又川さ

隅田さる橋

○右平記大楠大さる出建さる 隅田さる橋おやけてさう  
さあさうけりけりけりそのおまき又いさあさうさうさうさう  
とさうーそのふをさうさうさうける  
はさのさうけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり





小條子代記

○小條子代記才二

正木子ゆひたる桶の多賀きれてあるはなすれ池の和田式  
○是ハ下総玉里尼我弘を小條氏康やめられ時孫浦  
正木方とち更此和田ハ多賀花人左城セリ子孫  
城の時乃前也

○寛子永禄七年甲子正月八日小徳園村彦全我里兄義弘討死太田貞清等二千人原本城惣付一連取りし時の  
後也

我弘くたのむ片矢の思付てかゝるはめに太田貞清等  
身の果

○寛八上板に戦後の京虎を頼むに依て日十五年の京  
虎上板に沼田の向ふとつとも所康出る所のかいりく  
戦後一箇年その時その後也

京虎に戦後かゝりあふまて沼田に入て是ぬ  
とよこし太田貞清は其の城に在て京虎をたむ  
とつとも叶はざりて城を開返ぬあり

上板を伐たふされて貞清のさうたのこゝ京虎も  
とそよこしりる

吉中親王持現は

○吉中捨遣物語一親王持現は役の要は雲のけいひもさ  
あふよりこのゝ靈騷ににわてやけるより大塔金堂  
玉をみりきゝ武蔵守原武に安永の軍をたふし  
と親しいなりゝと娘いさへりありゝとを娘め  
て親しいなりゝと娘いさへりありゝとを娘め  
伽藍を焼るなりゝと娘いさへりありゝとを娘め  
といひ佛といひ二世の昔にやつてのうれしやか  
ともゆりゝと娘いさへりありゝとを娘め  
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あはさるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よこそけぢよ、淋な方便のるよこそ、何れ佛もな、荒生  
荒生ハその佛なり、罪を作り、うゝこそ、また罪をも、うゝ  
めさむういて、なこそ、何ぞそれと、あつて、そのあつちなり  
らんとこそ

童子歆

○後撰集は、親のふふまうておそくをねはつゝ、  
人の女のかみはなりき。  
神を忘れずも、くもをきく、いとふ



家醉賞更飛鍾

○詩

○為東定家

○明月記元仁子乙酉二月八日退出後退宿忠弘宅依窮  
屈為町敷也于時曉鐘頻報 丑時

松色遇春、樂成料知仙筭久誇榮老松伴得抽貞士  
三葉押思大樹宮

沈論壽考、才事追三代之新任事仕依顧運述懷也

○安其子乙酉三月廿九日天晴忠弘法帖也札書來同檢任依太

細能居之妨知行孫遺不遂想以少驛吏下向、要後悔百

子曾源及三月洛難達云、

六十九年暮暮公羽孟春一月去如夢。何時何日走身於  
西沒斜陽今日孫

○日本後記弘仁十四年二月癸丑幸無 品有智子内親王山上  
欣然賦詩俾文人賦春日山庄詩各探勤韵公全探得塘光行  
蒼即瀝筆云

寂々也莊山樹裏仙輿一降一池塘栖林孤鳥識春澤  
隱間寒花見日先泉声近報新霽音山色高晴暮雨行  
從此更知思顧渥生涯何以荅穹蒼

○林道春凡泠詩

木下氏別記

渾身是口橫虚空不問東西南北風終日為宅說般若的  
丁東了の丁東

○徐公真筆精

倭夷入貢駐舶杭城外湧金門咏柳詩云

湧金門外柳如金三日不來成線陰折取一枝城裏去教人知  
道是春深

卧游漫抄豐州原田直著余後觀夏石砧人西湖志貢友初柳洲  
亭詩有云湧金門外柳如金繞到春朝成線陰遮莫折條  
城市玄春閨好恐傷心此二詩如一手做也豈中夏好事  
者贗作以為吾邦之詩歟而竊疑徐惟起及貢友初時世相  
皆則徐氏必不可以此師襲也疑二詩偶然相符合須因筆  
而出之以俟知者

野馬臺詩

○應仁記序 夫於前代陵谷之變化者諸家之志記雖普載之而宋曾聞謂記此應仁丁亥大動乱大抵吾朝終始之真廢者聖德太子之未未記雖委書之取無如寶誌和尚之野馬臺就亦野馬之詩二十四句内上十八句前代騷仁皆所下涯也雖然於未六句者時代未來故先人冒不注之處也而此間時世滅亡休偏如野馬臺之未句相似於是其偃鼠苟嘆無所記飲河叨瞻瞬以鷓鴣和尚之床前呈一救之草柴耳

野馬臺詩

○万物故事要決ニ野馬臺ハ唐ナリ名ツケル所ニ日本ノ和訓ヲ云々借テヤサセシメトバトハ同ニ音ナリ而ト摩多トハモトハ日本ノ法度アリ云々之の如ク放ナカクヤ摩多臺ト云々リハハ倭ニセサレモ何の以篇モ唐ナリヤ出サレモ之ヲ備大後ノ唐ニモ後タリ云々文ヲ野馬老トシ日本ノ如クヅミ末の事云々多ク知レバ云々之名トハ云々トシ是ハ寶誌和尚ノ撰化の人乃作ラレケル文云々之ハ和尚ノ家寂ハ蒲津ノ天監十三年甲午年ニ我朝ニハ 德體天皇八年甲午ニ當リ云々ハハ文ヲ左傳大ニハ讀セタリ人乃ハ作ト云ハ大ニ誤之長安寺ノ縁紀モその中載ケルケルハ唐ノ玄宗皇帝開元廿二年甲戌ナリ本朝ハ聖武天皇天平六年ニ有リ云々既ハ其ハ和尚入滅以後二百餘年の後ニ大ニ遠リ云々其時々の如ク讀ムキハ是書ナリケルヤ又野馬臺トモナリ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

○河上贊仲當家文章第二云勸吟詩寄紀秀也文慶以來有職之士或公或私角好論殘三

不坐謂之癡鈍其外只醉舞狂歌罵辱凌轢而已故製此篇寄而勸之

風情斷織壁池 更恠通儒四面多問事久嫌心轉石論經

世世貴口懸河應醒月下徒沈醉擬噤花前獨放歌他日不愁詩與少甚深王澤復如何これ我論をぬむとも嫌いて詩志を盡れんるも物めさやあつてさす

木朝文粹第一聖痛傷野大夫雜詩云

紀相公應煩劇務自余時輩物惣鴻儒云け鴻儒とあるは上の自派あるく才二乃のとくあ紀中納言延英以後侍野ももええより宋儒の侍の度よりあれりとつてもを我論よあけらえけやああいとに系極其つののさるあつてさあむをおくさつとあ

易明寺時和詩及條條項

○北條九代記九弘長三年十月廿二日正五位下仍お授る年和詩和  
入乃道宗最明寺の山亭より述をり年廿七歳之云く  
條條よりひて衣袂ゆきを著し繩床より坐し條々々々條々々々を  
書て云

業鏡高懸二十七年一槌亦碎大通坦然

弘長三年十月廿二日道山宗跡をとり

回文詩

○老圃堂集上曰文那波道圓男祐守之集之

嬋々風枝動團々露玉飛條叢鳴蛩乱林暮噪鴉歸

咏孔雀

祇園瑜 南海俗稱市

孔雀生南越五采何提  
十步一顧影五步一顧尾致  
君玉堂上恩愛無所比珠玉為我籠  
稍梁為我餌鍊尾為君舞滿堂誰不喜  
奇珍世所疑奇服人所指一朝被諛言  
恩愛不可恃毛羽非異初君意已非始  
未能從鳳翔寧為野田雉

○詩句考證之部

掬水月在手弄花香滿衣

○金唐詩話 千良史春山夜月之春來多勝事賞玩夜  
忘歸掬水月在手弄花香滿衣與來無遠近欲去惜芳  
菲南望鐘鳴處接臺深翠微

破鏡不重照落花難上枝

○丹鉛錄 洞山語錄破鏡不重照落花難上枝絕似唐人樂  
府也

近水樓臺先得月向陽花木易為春

○楊升庵外集 花文正公鎮錢塘兵官皆被薦獨巡檢蘓麟  
不遇乃上詩云云公即薦之

山花開似錦澗水湛如藍

筆叢三 智洪倡山花開似錦澗水湛如藍 刀樹幼鈔



あゝの月さへも

おとあとのうら

さりの紅葉とくうす菊

四十二 拙筆

むうー奈保の帝の時時よあまうー春空の清く  
けさやあまうーすけるに二月六日のころ南原  
の橋に夕ええにあうぬをそく柳の柳にええの  
糸を乱したるうとこさそれよりけは御あおに  
まに春のさやの仲やけるまを秋といつれな  
ぬとるれどお物のなをとふの事はあれてかるき  
秋の夕さこそけうー春まををれ我邦に秋を  
あられささうぬとこそんはれいに空あなうやこ  
作やどはれに中まのけさよりさうのうすやに  
あふさふまうとさといひさうひさう秋をさる人  
とあふさうさ秋のそくてまうさやを清く  
て其秋を何れむとわうさうとさうさうさあ

うきうきといふはつれいありやとわめ  
て早うお参しよとてはなほ待てぬまひ  
のすけあやめは使つられおのくまの  
いろくのすやうと海のものであつて中宮  
のきくをともとて今日とるれつて友上人も  
はあはれといふまづうのほろより

うきうきといふはつれいありやとわめ  
て早うお参しよとてはなほ待てぬまひ  
のすけあやめは使つられおのくまの  
いろくのすやうと海のものであつて中宮  
のきくをともとて今日とるれつて友上人も  
はあはれといふまづうのほろより

四十二の抽年

まづこのまゝなり

月のあや

あやのまゝなり

随ちつゝぬけはまの月いふまゝなり

東のふと

あやのまゝなり

月影の出づ

まづあやのまゝなり

時毎と

松風と

中宮のきぬ

つぎつぎとこれと松風の時毎のきぬがまゝなり

衣井も

あやのまゝなり

衣のあや

あやのまゝなり

あやのあやをえしとあやのまゝなり

これとこれと

中宮のきぬ

あやのまゝなり

風よ系す柳と 夢よりかきと

江濃後の女侍

あき柳のしづも道よやとくくすのうらさきもあれ

秋と ときと 清涼後の女侍

村莊のあもけりる詠めうきうむよの秋の上風

ふと ことと 相室の清良不

濱もきれもんぬけとくきわきの浦よきい

風あひいと ときと 空屋のたまき

黒坂のきれききく鞠うも見おきしゆきなり

雪と 郭と 春空の法祖文太右

梅うえに鳴ききりけりきりきりきりきりきり

うとまききりきりきりきりきりきりきり

大右

かききききききききききききききききき

曉のききき 夕のききき

日向輝きよききき

曉のききききききききききききききききき

枝よききききききききききききききききき

子桑大納言

紅葉のききききききききききききききききき

ふめと ことと 九条宰相

塩中の浦ききききききききききききききききき

日向のききき

葛城の神おききききききききききききききききき

花と ことと 近江大右

紅葉のききききききききききききききききき

ききききききききききききききききき

三位中お

曉のりよの神の奈よりも同ぬきみやうのふるに  
うくとあるとめと うき中と

四中お

あふふせうをとおめてゐるぬきをのりよに  
白菊と梅と 六条院の中納を

白菊はけりふをえんきし新の梅のよきや思ん  
四のふさけは猿のちと 二條の堀ゆと

四佐中將

うきとふしよのちとづちとあふふ條のきり  
きを里の烟と 山あけうの横と

た條つ智

きととや一節うさ夕烟きひききにはふしよの  
きをきとや一節うさ夕烟きひききにはふしよの

二後とふと

あふふ中お

ふふふやふふふふふふふふふふふふふふふ  
山根のねと 新のちと

か細き

さしさふふふのねやふふふふふふふふふふ  
上隔人ぐうみと 玉眼ふふふふふふふふふ

ふふふ中お

あふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふとめと 中お

武花野のやうのふふふふふふふふふふふふ  
賣ふふの菊と 新すふ海人と

中ふの法やうとふふ

坊の烟に川るふふふ 新すふふふふふふふ  
女部ふと 接ふと 内侍のふふふ

中ふの法やうとふふ

をまゐつゝ志願を述べしむれどもねとせしむ

を井の原と ことせしむの記を巻と

ちをまゐつゝ

ふかやけのきり枕雲井の原のまゐりしむ

師云

ありあゝとぬきと せしむるをさるゝと

よえよの流れんよりふれきり物をあもさるゝ

友と 山吹と

中宮のちゆき

池のそとよりふきとぬきとてさるゝ

卯の花と 椿と

お坂ちゆき

玉つたきふをさるゝるれ世を卯の花も何とせん

かやうにうゝいあやうけん院の室お

まゐりてこのすをけりけれごとくはくむ

女院やふせやふきつありひふめ今のほり

うゑとまふとふやとぬきとあひくれつれ

よんごりつるをりやうゝはれひとけ

くやとるゝとぬきとあひせけるいふ

伊勢と おきと 院の法々

くゝの天照月のえいふふ年あふのうき世のうけ

八幡と 熊野と ちゆきの室お

四法ふきと流れもいふてあやうむのふき

女一のまの法お氣よてりつゝせうのい

井の浦

世も寺の僧正寺かおとまりあやふ

せんがうと

れ際と

僧正

南をきく人よりすむるはるあやふもあやふもあやふも

その後帝より又あよきおたきと上層のえも  
きつばうさうられて慰むものもそいふを  
管経してりも音一にがかん年寄を  
ころるあやめの儀よりかりてあやめと我を  
かおよこころきつる人といわれるえもいふ  
女房くちのかことしてはねてさる  
肉のすけりて中宮のゆき

女房

あちき新 海の流の流れより若むとる月をあらん

あやふ

弘満殿のうけ

るれはるあを河よりすむ訓てさむとるをあらん  
源氏の女を名柏木の隣りのあやめとあらん  
ふつてくれはるあやめとあやめのあやめの  
てを業あらんあやめとあやめのあやめの  
いされうーんをいふれうてあやめ

あやめのあやめ

あやめのあやめとあやめのあやめのあやめの  
暁月あやめのあやめのあやめのあやめの  
あやめのあやめのあやめのあやめのあやめの  
あやめのあやめのあやめのあやめのあやめの

あやめのあやめ

あやめのあやめとあやめのあやめのあやめの





たのふを源氏物語のおおりのわきま万葉集巻二額田王  
の歌にて  
つるも川紅花をよみ出のきこえくあや秋夜あり  
とわたり物おもふ葉集巻三よみ武なるもあのおそ  
けあを

○紀伊之集云

○拾遺集下

つるも川のきこえくあや秋夜あり  
とわたり物おもふ葉集巻三よみ武なるもあのおそ  
けあを  
ま秋のこひさふくささのけふつるも川あり  
あふふ隆

○拾遺集

題云

漢金

まふさく花のひとく咲いりおの衣は秋夜もさる

○拾遺集

元良のみと水蓮屋のきこえを秋つれ境

とわたり物おもふ葉集巻三よみ武なるもあのおそ  
けあを

あふふ隆

あふふ隆

○碓氷州星が 成寺の児二人 母のなきものうらなれど  
くろくひちちるこえとて けしきもとほれど 西三条  
実隆公  
くろくひち

花ちいさめ物もろくし ちあちとくちあふのちんちの  
きろく いくを神をりいさ 花のやうなものさの山とて  
くろく 月をいぬ 物もろくし ちあちとくちあふのちんちの  
物もろくしとてのちんち

○流石よ 花ちいさめ物もろくし ちあちとくちあふのちんちの  
くろく 月をいぬ 物もろくし ちあちとくちあふのちんちの  
物もろくしとてのちんち

○同上 花ちいさめ物もろくし ちあちとくちあふのちんちの  
くろく 月をいぬ 物もろくし ちあちとくちあふのちんちの  
物もろくしとてのちんち

花ちいさめ物もろくし ちあちとくちあふのちんちの  
くろく 月をいぬ 物もろくし ちあちとくちあふのちんちの  
物もろくしとてのちんち

○まふせ夏 万花公歌ふ

定家

あゝあゝ秋よかき〜なるものなほなほなほ

の花

*Faint handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.*

○松玉集一法義海百首

さうさやをさす山乃歌とすもなほのまはさのゆきの

人つゝかたもさすやとあし秋のたふれさるあはれ

日 日 かなはさる百首

いふあそふ川の山さあなる人さすみよし秋をさす

はせさるを花をさす風さすさうさ秋の月

○まふせ 万花公歌

さうさやの時にさすあまをさすさうささうさ



○野提き 春の暮まゝ人仕居るを春の月と歎び春  
月ハ秋月ハまゝ水と云ふと 越後縣 倭館深く入り  
月と云ふは秋と云ふは人なり 花多の多も  
みよや○保國南の野花啼鳥一般と云ふは又  
東坡の春山礫々鳴春禽此間不可無我吟○東坡内  
制集五云仙家日月本長閑送臘遂春豈亦然○杜子美  
詩遲日江山麗春風花草香○王荆公詩春色惱人眠  
不得

秋のふゆの事

○万葉集卷一 天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花  
之艷秋山千葉之彩時額田女王以歌判之歌

今あるは民地也 春の暮まゝの所おかしのかの物  
も万葉集額田女王の歌なり  
秋の暮も秋の暮も急くあや秋の暮なり  
と云ふは秋の暮も今万葉集卷一と云ふは秋の暮  
と云ふは秋の暮なり

○拾遺集

題名に

續人

まふくく花のひとくはくく 物の言ふ秋もまふく

。元良の親まふくぬのとく子よふ秋いつれも

増ふと回ひりれい秋もまふくゆふとひれい面も

桜もこれいうとひとくくはれい

大うこの秋まふくやぬれと花んもまふくつるもねし

○徒然草 <sup>上巻</sup> 秋のうつろふをうけとれにあらまきうれ物

つるはれ秋もまふくとくこれいふあれとくまふくものま

くひとくまふくものまふくこれいふあれとくまふく

○白氏文集 大感四時心捻苦就中腸断是秋天

○百葉集 天皇詩内大感四時心捻苦就中腸断是秋天

○源氏物語 秋の花をうけまふく

る事書の年よりいふ秋のうけまふくをうけまふく

まふくまふくのまふくをうけまふく

のまふくも世のまふくのまふくをうけまふく

のまふくも世のまふくのまふくをうけまふく

のまふくも世のまふくのまふくをうけまふく

のまふくも世のまふくのまふくをうけまふく

のまふくも世のまふくのまふくをうけまふく

のまふくも世のまふくのまふくをうけまふく

まふく

まふくも世のまふくのまふくをうけまふく





夏の子

○史本孫七楷而治之石首

後京撫政

情のたれ、里のたれ、甲斐のたれ、あなぬき、妻の何けん乃

秋乃何けの

○一時はるるまきの候に古来の秘蹟より我まよふにありけり  
 一ぬ秋の夕暮のるもてよさひさうとて流るるるるる  
 のふとて何まのく人のあやえしとてさうとて秋の雲我  
 こそ又かぬ心の痛むるを思ふるるるるる

志をなすに事ありてみえそ風よ志を如  
 秋の阿多野の

竹生うきうきなるむかし  
のこたへに  
うきうきなる

○拾玉集云：大作家之万壽膏，合万首。

新志

いさめよ。いさめよ。一をたぬゆゑもまゝ。秋の明の

秋の夕暮

○拾玉集一は表紙百首 雑

人いさる衣もさして中なる——いさのゆるれまのあふの  
同二 空山百首 歌

まもなるとあふめや——いさのゆるれまのあふの

あふのゆるれま

○拾玉集一や

さひ——いさのあふれとく——いさのゆるれまのあふの

あふのゆるれま

○拾玉集一は表紙百首 雑

こはいさのあふれとく——いさのゆるれまのあふの





Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note, spanning several lines across the top half of the page.

Handwritten text at the top of the page, possibly a date or a reference.

おのり

○ 拾遺集  
る月か合 志  
るをいふるの社をふのりよりれ 志の明の

おのり  
○ ままお  
ちまらる 穢しのちあひきふる ちまの入りよのあきの明の

あめのゆふれ

。松玉集タラシ

いくよひうめふのあふりしとふらうらふめあめタラレ

あめのゆふれ

雨夕暮

○子かるあふ合雜一

ふゆ

あうくよあふめめめあうきなるのゆめあめタラレ

○山崎虎建保二年あ合

深山

松方納言

あふりしとふれん山さきりしとふらのあふのゆめタラレ

○松玉集タラシ

あふりしとふれん山さきりしとふらのあふのゆめタラレ

同六 田家集

あふりしとふれん山さきりしとふらのあふのゆめタラレ

○金杯集十

名所

あふりしとふれん山さきりしとふらのあふのゆめタラレ

風のゆめ

○松玉集七 秋南海江父社十首

新ちやまの秋の物さきにそねあゝる風の夕さ

常の夕さる

○松玉集七 百首月会秋

あそくちの秋あゝるあゝる松の森のさうの夕さる

葉のいさくくうふ菊

○赤松集七 十月、紅葉のいさくくうふ菊と  
をいつて人

秋さくくうふ葉のいさくくうふ菊とくうふ葉の  
う

夕暮と朝旦

○後撰集九 恋一 あひさうてをうけり人の心よ西

半そとてつりけり

元良親王

くやくとま川を渡るかきとて 海をけりさうれ 堀の

夕暮ハ 松もかき 白老のあくる あはれはま川上

待月と文藻

あはれと月

○古抄花 ありさうのいふやうはあまのこに 白き花もいふ

○昔抄花 以事の月のこれあまの月のいふやうに 白きとふ

○文級花 もろくろあまのやうに 白きとふ 暖人ともあまの

あし 子

壬生太見あをき京の平のあやしと續古今の誤のり

○續古今集

新古今集

様人、社寺、くちや、よる、雲、吹、あ、次、唐、の、う、や

○ふ、香、中、情、雲、吹、越、る、次、唐、の、浦、風、の、あ、壬、生、太、見、あ、集、る、侍、  
る、之、新、中、酒、の、あ、乃、よ、は、物、種、の、あ、く、り、れ、を、續、古、  
今、源、氏、の、あ、つ、き、て、は、る、な、ち、新、あ、の、あ、く、り、た、く、る、あ、  
見、あ、そ、侍、あ、や、の、う、い、う、あ、か、く、人、の、う、も、源、家、が、  
お、た、め、あ、る、と

○ふ、香、中、情、雲、吹、よ、れ、源、氏、物、種、を、あ、く、り、と、續、古、今、集、の、  
う、り、あ、く、り、た、く、る、あ、く、り、と

伊勢物語のあ、あ、新、あ、今、集、あ、集、あ、新、集、の、あ、と、や、一、集、

○伊勢物語 む、り、の、あ、く、り、

芦、の、屋、乃、あ、く、り、の、あ、く、り、と、あ、く、り、の、あ、く、り、と、あ、く、り、  
○は、あ、く、り、の、あ、く、り、と、あ、く、り、の、あ、く、り、と、あ、く、り、  
く、り、彼、後、人、あ、く、り、と、あ、く、り、と、あ、く、り、と、あ、く、り、と、あ、く、り、

修名院ありて... 自記... といふやうなり

伊勢集系後撰集終のあと 躬恒集終のあと 同時録のす

○河勢集 後撰集

さうさう人の指と人のかもあへお教へてけ  
よふいと人の指のきくさるるやうにうけ  
あつてさうしてはうのり... といふ

○凡河内躬恒集 兼在院... 終のあと

さうの身さへもあつてさうにうけ... といふ

○今よりよはあ、同時の録... といふ

法京元輔集あといふ葉集和歌式部あといふ

○法京元輔集 前の式部あといふのり... 乃おを

○玉葉集系後撰集終のあと 躬恒集終のあと 同時録のす

○龍大沖は秋ふ今のあをよ... といふ

あつてさうしてはうのり... といふ

あつてさうしてはうのり... といふ

○あつてさうしてはうのり... といふ

ま柳の葉ハみよりよき柳哉つても河のなるらん  
このま柳き葉第九報には件文のおとて載せられ  
かき柳をよみ入る

歌輔新古今集の歌 今抄集 後拾遺集 今抄集 今抄集

○今抄集 下秋歌

年つものこの山よりまき柳の葉をよみこれとハス

大中後能宣集 今とまき柳次順歌と同

大中後能宣集 今とまき柳次順歌と同

山の麓けり庭火ののきなり 柳の葉をよみこれとハス

このま柳き葉第九報には件文のおとて載せられ

今の中ま柳き葉第九報には件文のおとて載せられ

堀河院を帝る首 歌集 玉葉集 今とまき柳次順歌と同

○今抄集 七夕 歌集

ひさのま柳き葉第九報には件文のおとて載せられ

はま歌玉葉集 今とまき柳次順歌と同

堀河院を帝る首 国信歌を何花集 国信歌を何花集

今抄集 七夕 歌集

山よりやま歌集の柳てそやうてあるけのまき柳

はま歌玉葉集 今とまき柳次順歌と同

浦のま柳き葉第九報には件文のおとて載せられ

堀河院を帝る首と新集を今抄集のま柳

○今抄集 七夕 歌集 我をよみこれとハス

はあ浅新續なる集十五巻云永子や建由表あり又あ原  
兼壽にて或らぬやをわし引致すつれるまにふひたてて  
こゝろとみそはるるををむとわさや五月葉寫  
おろすの刺えふまやろくし

堀河院る者あま抄より信のり

○た部百 抄あり 公實

花よりまゝ里にまおかしつゝ信ためさへきぬふさる

はあをあま抄より堀河院は時る者杜あ前新まのり

引くる信に河内ある者く割く

日抄る 公實

きしのろ新うろの信雪ふこそのかさ成たぬなりなり  
はあをあま抄より引く基後とや一信の信に

あり上人あ家集撰集ふ集を世に信のり

何よりあへまにふあふさかへけさきに信のり

或人あ家集撰集といふもの 延宝中より寛政中へ

勢名あ家集撰集といふもの 延宝中より寛政中へ

河内山田集り 杜あかへけりや

あり上人の集るる信のり

へる人の集るる信のり

やり又巴といふ信のり

一着の信のり

あまに信のり

あへり信のり

とくくを伴ふ法ありては後ありてはひふか  
去る山の事よりゆり上人の住み居る所の事  
法ありとありふくくは法ありとありて人  
山家集も撰集もえいふとくく世にかくては  
るも多し可なりといふより多しとて芳雅山  
たる事みと小堀をいふ事常庵の苦法ありと  
とる事みと小堀をいふ事常庵の苦法ありと  
その事みと小堀をいふ事常庵の苦法ありと  
あて又いふ人いふ事常庵の苦法ありと  
長傳の事とありてはひふか  
いふとくくは法ありとありて人

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか

平家集の事とありてはひふか



といふは情も防人なるものなり。秋やふ不韓亭と云ふよ  
里そそよきよ。一人の唐の事と云つては。ちと  
くつ。と拾遺集今云ふこと。こゝろまじ。ちとある  
たじき。そは勅撰るれ。中比。さうに書写。や。比。かく  
候。の。こ。あ。れ。い。徹。さ。る。に。つ。て。さ。あ。つ。れ。よ。う。人  
— づ。ま。あ。と。あ。— を。今。即。よ。い。わ。づ。さ。る。と。よ。う。人。丸。の  
秋。あ。れ。い。ほ。の。お。あ。人。麻。呂。の。秋。や。い。も。さ。う。う  
さ。き。と。— き。万。葉。も。て。つ。と。あ。—

○後撰集

よきえき。今。何。— ち。我。君。の。梅。の。め。秋。あ。つ。—  
この。お。上。侍。あ。つ。つ。あ。あ。う。う。く。う。— と。と。あ。

新撰万葉歌後撰集は後撰のり

○河社集 菅家万葉集云

秋之夜之月影許曾自木間隨者衣砭見江且氣礼  
は。秋。後。撰。集。一。秋。中。一。秋。の。な。と。よ。あ。る。後。人。あ。き。と。く。下。句  
ふ。ち。え。衣。と。あ。よ。う。う。り。れ。と。あ。う。い。わ。う。— は。い。な。う。か。た  
ま。う。ま。て。か。え。—

良岑残万の歌後撰は今集り後撰拾遺集は後撰と通照と信る

○河秋集 大和物語は良岑の集りなり。比。等の。今。あ。い。ん  
伯。け。と。女。の。も。と。に

か。こ。木。の。枝。の。下。さ。あ。い。ぬ。と。も。あ。う。う。う。に。あ。さ。も。何。う。え

柏。木。の。ゆ。り。れ。と。あ。い。の。あ。た。か。る。さ。ひ。い。何。う。— と。あ。あ。い。う。  
この。二。首。を。續。ち。今。集。り。な。れ。う。う。う。の。比。等。を。信。と。通  
照。と。何。う。い。は。良。岑。新。集。残。万。承。平。六。年。は。大。和。物。と。あ。れ





新の氣集再出の通照恒他を不月  
子月あることわけて物をいふことなぬをいふことなる  
此の氣集の氣集なるが故に不悉通照をいふことなる  
初よりあることなることなることなることなることなる  
つるものとありて終極して或るいふことなる  
後よりいふことなることなることなることなることなる  
へき又等類として二首のいふことなることなることなる

○中絶の類なるが故に撰集は新集とせしむ

中絶を新集新集の家集はあつての中絶を乃そのはやりたる  
をいふことなることなることなることなることなることなる

みちなるが故なることなることなることなることなることなる

このあはれ撰集十七巻なるが故に新集の類なることなることなる

えんとあつてあることなることなることなることなることなる  
かゝることなることなることなることなることなることなる

平氣補の家集は中絶の類なる

○平氣補の家集

かゝる撰集なることなることなることなることなることなる  
はあを中絶の類なることなることなることなることなることなる



可なりと身は我れにやまらにありてはこそ君をいふめ  
今もあはれおえ良親まの底へくつ病を平中無う娘の  
とてふんふは母のあこころを我平兼輔家集よりこのあ  
をよきその宛きそ何こなりける男の何あきとゆうける  
よおなりていけりてあなりともそとつれりともつりきや  
定めり

大和物語ふ集師衣くお伊勢家集新ふ裁集のま同す

○大和物語ふやうくそとく人なりきとよきひてかこせり  
ける

あわれぬのそとれ下まこあれてはれぬ恋にぞかりたり  
おれんふ  
これにほつたりれ下まこあつたりともあふゆふか  
今ふふはお伊勢家集二首あつくおのいさく  
人とのこもそとく自派まよとくあれぬとあつま  
新ふ裁集意一は二首とあきれくおのと批把太

ほとそまをこりかりりともみ  
きい大和物語よきお伊勢家集をとりて裁られなる

雲の上は〜さるかそ〜ゆ〜玉集のうらやめ  
はあ<sup>後世</sup>或女房のあつるをゆりし所へあひつ製とひ  
一文子のひとを鶴鶴五とて山河の作とあつるほと  
か油之信ぬえりきあ成憲<sup>や</sup>或女房とのほとそ  
○十訓抄き成憲々半ゆりてはくされて内裏はあられ  
くけりる若く女房の入るあつ〜の今もさも何ざりけれ  
は女房のあつり若く思ひ出く

雲はういあう若れ〜と〜玉集の内やゆり〜と  
とよきゆ〜と〜けりて返事せんそて焼けのさそふより  
けるおとんお松の太はあひつれがあつぎとくそお松  
の太あかきけりけの太の〜と〜やあをけりて例まが又

字をよき清筆のゆき—今出れより女房えて見  
るん文字一つよてくもせれりけるあか—うりり

大伴家持の家集のあ躬恒長あとい

○あ持の家集よ

つとみきりる衣白あまたけりけりあやと記  
ふあひはあ躬恒あ集よ出—あ乃あを  
とあはあ後人のあえあ—  
式

業平家集と古今集後撰集のああ

○河社集よ云業平集よ

あいのあえあ—あよあ—あ—あ—あ—あ—  
○ああ今あの後撰集ああ—あ—あ—あ—  
あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—  
○あああ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—  
あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—  
あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—あ—

今二首は撰集も業平とて載れどもさう  
枇杷左大臣とて御伊勢よりそれより業平の時代なり  
伊勢家集も枇杷左大臣とて仲平とていひてん撰  
して写さるゝの誤りなりと云ふ事もあらずと改めざる  
ぬつと云ふもあらず枇杷左大臣は撰の文縁に載り  
○今二首は撰集のつゝは撰集より以て業平の代と  
まづさや今の板本のハ代集の中にあらず枇杷左大臣  
と有り是なるなり

平兼輔集のあし所と小大君集とあるなり

○平兼輔家集

よんこ川の本のものと云ふ流わきう歌をみとて  
このあし所集より小大君家集よりとて流の  
あしと入るなり

後撰集にも閑院左大臣の詞

後撰集は歌あらず

閑院左大臣の詞

あるなりよおつるものを梅の歌ときひて我や衣あはれん  
今案よは他より一文史実源より二系祥三年秋七  
月西子朝士辰通宗外祖文左大臣正位藤原朝臣冬嗣  
為太政大臣とてん御よりは集より閑院左大臣の平  
を撰るは左大臣とてん或れハ冬嗣あり閑院左大臣  
改を撰とてん或れとてんなるなりさや平閑院左大臣ハ  
別人より冬嗣とてん後人の誤りなるものなりなるなり  
るなり

後撰集とてん花柳とてん是同

後撰集

花あはれをくまひき、雛波の岸のあし所あり白を



てふけり也

后子の伸子ぬ乃高作之是同

○宝物集一 辰まのとのをてい何うもはきり  
 朝きよあすあ 以て世継ぎにほふ他を降西の物語  
 まゝ小龍安殿書彩の陣の座るあそけり初めの面白  
 かうけるをえそと今古湯の中現きのきつぬしこの面白  
 けやゆきより教本の君きりかひたりねれぬあまふ  
 やあといひられ讀あつと傳り捨建今まのあきあふ  
 ほろ忠とらへ又公定の集あけりあかのあき

てありれは其柄の橋よもなるこは此一我新なる集  
難う其柄の橋よもなるこは此一我新なる集  
はるく是よれ一うなるうてあつるを付くと  
橋應とらるける集よええと

壬生忍ふ新拾遺集よもなるこは此一我

○壬生忍ふ集 あつて哉

白雲のあつてやうに流るるうもそのあつてやうに  
はるくはるく集物なる壬生忍ふとて此らるる集  
集多くたえの集もなるこは此一我新なる集  
よこそはるく集もなるこは此一我新なる集  
さうさう

源順分と小久忍ふの集よもなるこは此一我

○源順集

大井河を渡る秋風さむれは此一我新なる集  
この秋風を渡る小大忍ふの集よもなるこは此一我  
大井川に渡るのさむれは此一我新なる集

中勢集よもなるこは此一我新なる集よもなるこは此一我

○中勢集

いそのあつてやうに流るる集よもなるこは此一我  
はるくはるく集よもなるこは此一我新なる集  
さうさう

中務家集と伊勢歌集並に拾遺集是月

○中務集

年月の初らるも **初** 秋なるれと人乃見えれ

○河津磐石云は **初** 拾遺より伊勢の初より **初** 秋  
の **初** 秋なるれと人乃見えれと人乃見えれと  
初れを **初** 秋なるれと人乃見えれと人乃見えれと  
いと **初** 秋なるれと人乃見えれと人乃見えれと

源信明と中務家の同

○源信明集

末の山より **初** 秋なるれと人乃見えれと人乃見えれと  
○今集より **初** 秋なるれと人乃見えれと人乃見えれと

紀貫之集新と今集集と異なる

○貫之集

あとのあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり  
このあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり  
いふよりあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

紀貫之集新と今集集新と異なる

○貫之集

あとのあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり  
このあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり  
いふよりあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

源順集の内記のうり乃新と今集新と異なる

○源順集内記のうり乃新と今集新と異なる

あとのあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

このあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

いふよりあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

あとのあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

このあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

いふよりあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

あとのあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

このあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

いふよりあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

あとのあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

このあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

いふよりあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

あとのあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

このあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

いふよりあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

あとのあひもの代流れを流しあふ乃集こそけり

大中後集を以て玉葉集と大中後集とを以て

○新集玉葉

新のりき。新玉葉と云ふは、大中後集と云ふは、  
今集は玉葉と玉葉集。大中後集の玉葉と云ふは、  
これより大中後集の家集と云ふは、大中後集と云ふは、  
大中後集と云ふは、大中後集と云ふは、

大中後集と云ふは、大中後集と云ふは、

○新集玉葉

新のりき。新玉葉と云ふは、大中後集と云ふは、  
今集は玉葉と玉葉集。大中後集の玉葉と云ふは、  
これより大中後集の家集と云ふは、大中後集と云ふは、  
大中後集と云ふは、大中後集と云ふは、

雪玉集を以て新集玉葉と云ふは、大中後集と云ふは、

○雪玉集 秋七夕の事

雪玉集を以て新集玉葉と云ふは、大中後集と云ふは、  
今集は玉葉と玉葉集。大中後集の玉葉と云ふは、  
これより大中後集の家集と云ふは、大中後集と云ふは、  
大中後集と云ふは、大中後集と云ふは、

新葉集増補をふりて是月より

○左平記三後碇碇玉を言はれし通事の下四つりて中子の  
清方より清琵琶を述べてあれども其に又何り以て覽すん  
といわれ度のもつる四の張よりいひし何れなる後代  
に於ては清方よりみれば 列て新葉集

○増補元弘二年の事も成ぬ先帝はいまふは清方よりいひし  
清方よりいひし清方よりいひし清方よりいひし清方よりいひし  
清方よりいひし清方よりいひし清方よりいひし清方よりいひし  
清方よりいひし清方よりいひし清方よりいひし清方よりいひし

○参考者左平記三後碇碇玉を言はれし通事の下四つりて中子の  
清方より清琵琶を述べてあれども其に又何り以て覽すん  
といわれ度のもつる四の張よりいひし何れなる後代  
に於ては清方よりみれば 列て新葉集

○万葉集を入後撰集を

万葉集を

鳴呼人の浦ふるのうら<sup>にきもこ、</sup>人<sup>集</sup>熾<sup>をよめり</sup>等<sup>をよめり</sup>之<sup>をよめり</sup>あ<sup>をよめり</sup>もの<sup>をよめり</sup>子<sup>をよめり</sup>を<sup>をよめり</sup>い<sup>をよめり</sup>は<sup>をよめり</sup>り

い<sup>をよめり</sup>を<sup>をよめり</sup>い<sup>をよめり</sup>は<sup>をよめり</sup>り<sup>をよめり</sup>又<sup>をよめり</sup>玉<sup>をよめり</sup>を<sup>をよめり</sup>い<sup>をよめり</sup>は<sup>をよめり</sup>り<sup>をよめり</sup>又<sup>をよめり</sup>玉<sup>をよめり</sup>を<sup>をよめり</sup>い<sup>をよめり</sup>は<sup>をよめり</sup>り<sup>をよめり</sup>

万葉集を

奥麻呂

い<sup>をよめり</sup>を<sup>をよめり</sup>い<sup>をよめり</sup>は<sup>をよめり</sup>り<sup>をよめり</sup>又<sup>をよめり</sup>玉<sup>をよめり</sup>を<sup>をよめり</sup>い<sup>をよめり</sup>は<sup>をよめり</sup>り<sup>をよめり</sup>又<sup>をよめり</sup>玉<sup>をよめり</sup>を<sup>をよめり</sup>い<sup>をよめり</sup>は<sup>をよめり</sup>り<sup>をよめり</sup>

同書三

昔より清方よりいひし清方よりいひし清方よりいひし清方よりいひし  
清方よりいひし清方よりいひし清方よりいひし清方よりいひし

日

此の末なる人

明の香川かんよきとて此の香川のいほきとてあつる  
此の香川かんよきとて此の香川のいほきとてあつる

日

大納言

我々の梅の花とていふこの梅の花とていふ  
やとていふ  
いふとていふ

日

大伴家持

うらまゝとていふこのうらまゝとていふ  
いふとていふ  
いふとていふ

日

大伴家持

あつたつとていふこのあつたつとていふ  
いふとていふ  
いふとていふ

日

大伴家持

あつたつとていふこのあつたつとていふ  
いふとていふ  
いふとていふ

日

あつたつとていふこのあつたつとていふ  
いふとていふ  
いふとていふ



君「あ山田の海へよく泳ぎと雪のあに雪のすめぬれぬ

○はあ今なあ仙家集のうち土俵家おる茶や又  
てまゝ山りあふもすゝあつとあゝ後撰集  
中上段と歎ふる漢人——うゝあゝうちよまゝあれ  
うゝ神いゝまゝかゝうゝあゝとあゝたゝゝ万葉集のあゝと  
のあゝりあゝちゝゝゝあゝあゝ

○万葉集 建一山上 孫良 第九 河傳 皇子 漢成武 角沙尔

新勅撰十卷  
 白波の濱松のえのの事いふ代すそよ  
 新勅撰  
 年之  
 ぬ  
 寂  
 道

○河新整神云 此所抄文字風情として子載集新勅  
撰集新に後系極極改改ある所ありてある所あり  
と傳へける 寂蓮法師といふ所の文字風情として  
万葉集第一山上徳良等九卷は河新集の法  
として成て極た其説を治り 其紙抄は漢成式とい  
角河新に記述のありとあり 川の 新た今集新と  
万葉集九より河新集をあり 作者も是と  
て録撰者も是とありて載れりよやいふ所  
つうあるとあり

○物作新撰集採入

○句物作 吹上る  
い〜い 踏ま〜い 三輪の山松何 かといふあゝあゝ  
けふ新ふ哉集 恋ふ入く 儻人不知とあり

○撰集と家集異同

家集作と不同

後念ふ大長家

○新撰撰集

あゝめさし けふもさしめ ねたやけふのさしめ 秋の夕暮を  
けふ家集合撰集と秋海の夕暮をすくそ  
あゝめさし けふもさしめ ねたやけふのさしめ 秋の夕暮を

伊勢集と新撰撰集と異同

○新撰撰集

元々天竺製衣

月のうちこれ様のねとさや 夜のとれあゝあゝ  
伊勢集と新撰撰集と異同 けふもさしめ ねたやけふのさしめ 秋の夕暮を  
あゝめさし けふもさしめ ねたやけふのさしめ 秋の夕暮を

月のうら比佳の人をうそとや留る所のうらひて降る  
と云ふより似たりうらひのあらはれしを里をねと  
よまれしはまのほろへて是の集りもこのあひ七  
糸の流るをそ入らまうりつるをあらうり

新恒が撰集は伊勢歌とす信

郭云ねりきあつ月結とあそてこそねぬ人をまける  
この新恒は伊集原より新恒とて撰ふ歌集より  
伊集原とて入りたは歌集より見えそれとも新恒集  
は延喜十三年内裏屏風のあとも又云帖も新恒と  
いふ方も伊集原集よりねは撰ふ歌集をよそ人乃  
と加へしともあそ

紀貫之の花瓶の家集と後撰集とは異同

○貫之集第九の或部等の女伊勢のほろへてあ  
ちうは河りけるおてかあさうなる花をかくるそ  
よめる

うーれりてあを梅花のうさされとうらひまうり

あ代ふきうあを花さうあうと満るぬと

いお後撰集よりあを入て梅の花のうさされ  
けるあをけるをて中野まつりける 貫之  
うーれ

あ代ふきうあをさされと梅花とすんる  
あは新集にあらうりそのうらひ中野と見え歌集  
あは新集にもあをの物

小野小町家集と後撰集是月

○小野小町集

今こそ我身時あふふぬれこのなきよりうらひなり

○はる後撰集 冬あふ今歌あふ人  
よとて首句を秋そととてりもささるう  
ひさるのささるのささ

同集申 返る男の思ひてきかたれつる月のは  
くれうとて見せぬるのこそとらちをささるう  
あふむ悲あふむるものささるう

ひさるの思ひてきかたれつる月のは  
○はる後撰集 冬あふ今歌あふ人  
よとて首句を秋そととてりもささるう  
ひさるの思ひてきかたれつる月のは

赤原集と後撰集と 是月

をえ持山

○赤原集に女院とてのささるうのり  
よとてや伯母とて山の月とて那よにけり  
○今集よはる後撰集と 冬あふ今歌あふ人  
よとて首句を秋そととてりもささるう

○はる後撰集 冬あふ今歌あふ人  
よとて首句を秋そととてりもささるう  
ひさるの思ひてきかたれつる月のは

○はる後撰集 冬あふ今歌あふ人  
よとて首句を秋そととてりもささるう  
ひさるの思ひてきかたれつる月のは

後撰集教女の家集おとす

○後撰集 冬あふ今歌あふ人  
よとて首句を秋そととてりもささるう  
ひさるの思ひてきかたれつる月のは

のそえ集

あかの中も海り 足利の山海をくねりてまゐる

○けりて京師の集りてなり 雲も海をぬきのたえ

とて何

何故の集りて後機集後人不ぞとす

○伊勢集 厚のうへぬき代

聖徳ももろに我さももろにうへりてきき海り

この後機集も難にわたりて 既ぬき後人へなり

とて何 なるを

清元補家集 又本抄あるなり

○元補家集 云云に親王の御ありしをまひける日

何まゐりておやもろにやれやとねのりて海り

このあま抄 昔もあまは神のあまなり 親王の御あり

人ものなり やりしとあされとも初て思ふを時の

あまを傳ふにめりへりて是に元補のあまなり

又あまのあまなりその時のあまなり 何て何ての誤成

へー又ねに、あまの地名のありて、あまの伝説の海

と、何て、あまのあまなり

○四季次第


春夏秋冬四の時乃うつろふるれは源氏物語新巻  
法が納り紀流然系<sup>上巻</sup>のむじみそのむじみ出るやうは  
外費之節後の林をのさけようそめて都をきく知系  
を折雪をえるいつるまうと古今集のほろ<sup>新巻</sup>はかる  
る根ぬきのつたまの年のみさうはほろはるまゝお  
あはれを張るこはぬはる本葉よををわくまゝ上  
細り下れふいふいふしきまうもれあそふ花はる  
空のほをつけ通り月のけだかへつてめいゝまう夕  
かこの月をのさすもすれあそふむじみはるまう  
あまの詩文もまうこはるさるるこそはれ顧凱之  
一四澤のあき峰の雪明暉の月孤松の嶺胸刺るが

陶



四時縁のめき未彼、四時の初よりまていつきもあらず  
くのかあ、何事なり雅当秋の日の時の幽きもまていそれ  
ある事なり

○客斜随筆十四壬之處世見紛華盛麗當如老人之撫節  
物以上元清明言之方少年壯盛晝夜出游若恐不暇燈  
花暮輒帳然移日不能忘老人則不然未嘗置飲風於  
胸中也

○田舎日記  


○入りの月出のき風涼

秋部

○源氏物語桐葉

戦後今始久花母の家より傳ふ  
きる月風と涼、吹てさあむの虫の夢こそよりかゝる  
もそたちとくれあき、さあのもとなり  
秋部のくさあき、残つててもあきね、あきあき



